

2019年度 傾斜的研究費（部局長裁量経費）看護学科 成果報告書

看護教育・研究の基盤形成と国際化

首都大学東京 健康福祉学部 看護学科

2020年3月

I 国際化

1. 国際交流

国立台北護理健康大学 (College of Nursing, National Taipei University of Nursing and Health Science: NTUNHS) との交流

2015 年に学部間協定が締結された国立台北護理健康大学との共同研究・研究者派遣等の基盤づくりを行うことを目的として活動を行った。

2019 年度は高齢者看護学分野での交流を開始することとし、学部長 Dr. Wen-l Liu に教員の派遣を依頼した。3 月の来訪を計画し調整を行ったが、COVID-19 の状況により来訪が困難となり 2020 年度に延期した。

(文責：国際交流担当)

I 研究力強化

1. 看護研究等講習会

2019 年度からは、英語研修を看護研究等講習会に組み込み企画することとなった。また、内容については、2018 年度の講習会の状況を踏まえ公開スタイルを踏襲し、8 月、9 月、2 月に企画した。しかし、COVID-19 の状況により 2 月に開催予定であった早野 ZITO 真佐子先生を講師にお招きした「オーラルプレゼンテーションに挑戦！」は中止となった。企画内容は下記の表のとおりである。

日時・場所	内容
2019 年 8 月 8 日 (木) 16:30~19:30 場所：校舎棟 4 階 464 教室	第 1 回 英語論文と医療統計 講師：岡田悠偉人先生（ハワイ大学がんセンター・疫学者） 指定された英語論文とワークシートが配布され、臨床研究において必要な疫学・統計の基礎知識がわかりやすく解説された。参加者は、実際の英語論文を読み解きながら、交絡因子やバイアスなどの研究デザイン、検定や多変量解析などの医療統計について学修した。
2019 年 9 月 27 日 (金) 14:00~16:30 場所：図書館棟 2 階 203 講義室	第 2 回 研究に役立つ・活かす文献レビュー 講師：大田えりか先生（聖路加国際大学 国際看護学 教授） 実際の論文を用いたクリティークの実例を示しながら、①系統的レビューの手法と RCT の批判的吟味、②研究デザイン・サンプルサイズの算出方法・統計手法の選び方、③メタ解析の読み方（フォレストプロット）について概説いただいた。
2020 年 2 月 27 日 (木) 17:30~19:30 場所：校舎棟 2 階 実習室 2 (237)	オーラルプレゼンテーションに挑戦！ 講師：早野 ZITO 真佐子先生 中止

第1回 英語論文と医療統計



日時: : 2019年8月8日(木) 16時30分～19時30分

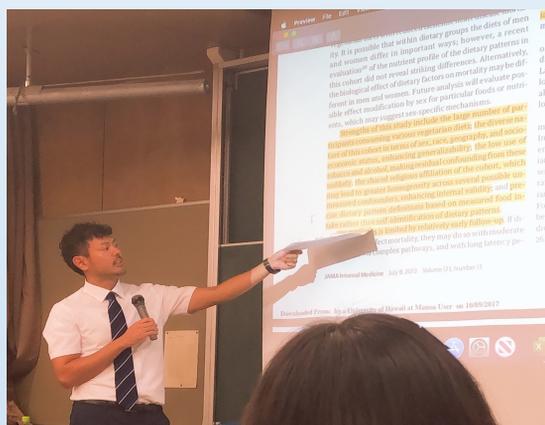
講師: 岡田悠偉人先生

(ハワイ大学がんセンター・疫学者・
ハワイ大学公衆衛生学修士 (MPH))



参加者: 34名

(内、本学教員7名・本学院生9名・本学学部生2名)



事前に、指定された英語論文とワークシートが配布され、臨床研究において必要な疫学・統計の基礎知識がわかりやすく解説された。参加者は、実際の英語論文を読み解きながら、交絡因子やバイアスなどの研究デザイン、検定や多変量解析などの医療統計について学修した。

参加後のアンケートでは、30名 (88.2%) が全体の内容について「とてもよかった」と回答し、複数名が「とてもわかりやすい」という意見・感想を記述していた。また、「わかりやすかった」と記述する実践者(看護師)・大学院生が多く、「英語論文への苦手意識がなくなった」、「シリーズ化してほしい」

「量的研究をしてみたくなった」といった記述も散見された。海外での研究生生活について講師の実体験を踏まえた話もあり、学部生からはキャリアデザインの参考になったという声や、「ハワイの看護事情についてもっと知りたい」という記載もあり、多様な知的刺激が得られたことがうかがえた。一方で、「簡単すぎた」という感想もあった。「もっと早く知りたい」という意見も多く周知方法に課題が残った。

看護研究講習会 開催報告

第2回 研究に役立つ・活かす文献レビュー

日時：2019年9月27日（金）14時～16時30分

講師：大田えりか先生（聖路加国際大学 国際看護学 教授）

参加者：41名（内、本学教員12名・本学院生14名・本学学部生1名）



実際の論文を用いたクリティークの実例を示しながら、①系統的レビューの手法とRCTの批判的吟味、②研究デザイン・サンプルサイズの算出方法・統計手法の選び方、③メタ解析の読み方（フォレストプロット）について概説された。

参加後アンケートからは、「量的研究に関心があった」他、「量的研究に苦手意識があった」ことも参加の動機として多かったことが伺えた。全体の内容に対しては、31名（75.6%）が「とてもよかった」、7名（17.1%）が「ややよかった」と回答していた。また、「わかりやすかった」「系統的レビュー・メタ解析・フォレストプロットの読み方など（なかなか扱われないテーマを）学べたので参加して良かった」「これから研究を行うために必要な基礎知識を学べた」

「（これから系統的レビューを行っていく時期のため）有益な講習会だった」という参加者がいた一方で、「知識がなく難しかった」「（内容が多く）時間が足りなかった」参加者も散見された。実践者（2名）・本学以外に所属する大学院生（10名）の参加もあり、「開催時期がよかった」「外部から参加できてありがたかった」「もっと早く知りたかった」といった感想があった。

「量的研究」に役立つ講習会としての内容のみならず、開催時期や周知方法等について、本学の研究力のさらなる向上につながるよう検討していきたい。

2019年度 傾斜的研究活動係 英語研修

オーラルプレゼンテーションに挑戦！

日時：2020年2月27日（木）
17:30～19:30

場所：校舎棟2F 実習室2（237）

講師：早野ZITO真佐子先生

イングリッシュオーラルプレゼンテーションの基本（構造や用語、言い回しなど）を理解し、自分の発表準備に活かすことができることを目標にしております。今後発表予定の方、すでに何度か発表されている方、いずれトライしたいと考えている方、どなたでもご参加いただけます。

【研修内容】

1. 英語でオーラルプレゼンテーションのデモを1～2名が行い、先生からコメント、ご講義（プレゼンテーションの基本）をいただきます。
2. それをもとに、プレゼンテーションを修正するミニグループワークを行います。

事前参加申し込み・プレゼン希望者は、
島田（shimada-megumi@tmu.ac.jp）まで連絡してください
締め切り：2020年2月21日
担当：島田・菱沼・坂井



2. 個別研究助成

2019 年度は、本学島田准教授を代表とした研究課題「荒川区地域住民のヘルスプロモーションに貢献する「暮らしの保健室 in 荒川キャンパス」活動の検討」について、20 万円の研究助成を行った。なお、研究の概要については、次頁以降に詳細を示す。

(文責：個人研究助成担当)

2019 年度 傾斜的研究費(部局長裁量経費)看護学科報告書
看護教育・研究の国際化推進と人材育成
＜個別研究＞

荒川区地域住民のヘルスプロモーションに貢献する
「暮らしの保健室 in 荒川キャンパス」活動の検討

島田 恵 岡本有子 木村千里 福井里美 増谷順子 坂井志織
石井佳子(東京女子医科大学東医療センター)

【研究成果の概要】

本学看護学科が、大学としての教育・研究機能を活かしつつ、荒川区地域住民のヘルスプロモーションに貢献できる方策を具体的に検討するために、看護教員による「暮らしの保健室」活動を実施した。

今年度、保健室は月 2 回を定期開室として計 20 回開室し、のべ 61 名が来室した。保健室活動を広く知ってもらうために、「健康・暮らしの相談会」とアロママッサージやミニテニスなどの「イベント」とを交互に開催し、来室者は女性高齢者がほとんどであったが、男性 2 名と子供連れの若い母親も数名が継続来室した。継続来室の回数は最高 4 回であった。加えて今年度は、荒川区主催の「長寿慶祝の会」の一環で保健室の拡大版を実施(記念品 368 個配布)した他、宮ノ前診療所や熊野前商店街で開催されているサロンへの出張保健室(2 回)も行った。

保健室での相談事例(抜粋)は、①訪問リハビリテーションの利用を開始したがサービス内容に満足していない(4 回)という相談に対し、サービス利用の仕方についてアドバイスし、自己管理の取組について支持した。その結果、相談者はサービス利用者としてのスタンスを理解し、サービス提供者とともに取り組む姿勢が形成されていった。また、自分でできることを考え、積極的に取り組む方向へ行動変容がみられた。②医療処置を終えた娘の退院が延びている理由が知りたい(2 回)という相談に対し、医師からの説明を補足解説し、続いて相談者自身の病気、症状に対する相談へと移行し、自己管理の取組について支持・アドバイスした。その結果、「説明を聞いて分かって安心した」と言い、ころぼん体操への参加につながった。③孫の先天性疾患は遺伝するのか心配(1 回)という相談に対し、疾患について説明を行い、相談者の祖母としての考え方を支持した。その結果、その孫を出産した娘に対し批判的な姿勢であったところ、最後には娘や孫の気持ちを配慮しながら自分の心配を話してみるという考え方に変化していった。④自分の病気体験を話したい(1 回)という相談に対し、病気体験とその思いを積極的に傾聴した。その結果、流涙がみられたが「自分には話を聞いてくれる人がいないんだということに気付いた」と言い、また来室したいと笑顔で述べられた。⑤その他には「体調や症状、その対処法について語り、アドバイスを求める」「血圧測定や血管年齢測定などを通して、現状を知りたい」などがみられた。

さらに、保健室活動に参加した学部生 5 名、大学院生 3 名、在宅看護専門看護師 1 名からのヒアリングでは、来室者は病院で出会う「高齢患者」ではなく、生き生きと暮らす「高齢者」という受け止めに変化し、その高齢者が入院や通院しているという逆方向からの当事者理解につながっていた。さらに、高齢者の支援ニーズに対する支援方法が柔軟に想起されていた。保健室活動が看護教育にも有用である可能性が示唆されたことから、今後はヘルスプロモーションと看護教育が循環するシステムを目指していく。